

十一（承前）

私が精を放った瞬間に気を失い、床に倒れ込んだ彰子の、裂けた後孔から血が流れ出している。射精の後の気だるさの中に浸った私は、その自分の行った行為の結果を見詰めながら、床に座り込んでいる。視野の中で、私によって陵辱された彰子の後孔が、やっと窄まりを回復し、そこから先程注ぎ込まれた白濁がゆっくりと垂れ落ちる。血の赤の中に、白い粘液が混ざっていく。その光景は、欲情を消耗させてしまった現在の私をいっそう滅入らせた。

私は、自分の剥き出しになったままの下腹部に手を伸ばし、陰茎に触れる。乾きはじめてた彰子の血と、精液の気味の悪い冷たさが、手に感じられた。

ぐったりと床に寝そべる彼女の横では、雅美が秘部に縫針を刺されたままで、彼女と同じく床に身体を横たえている。

私は腰を上げ、雅美の秘部に刺さった針を抜き取ろうと、尻の狭間に手を伸ばす。

肉壁に突き刺さった針に触れたとき、雅美が身体を起す。てっきり気絶していると思っていた私は、その動きに驚き、手を止める。

床に膝で這う雅美が床に手を付いて半身を起す。彼女はまっすぐに私を見詰め、私はその瞳の中に、強い欲情のきらめきを見る。

背筋に冷たいものが一瞬、生じた。

彼女は無言のまま、自分の横の床に倒れている彰子に顔を向け、尻の狭間の血まみれとなった後孔を、その欲情の光にきらめく瞳で見詰める。

雅美の舌が、多分意識しないであろうままに唇を舐める。

雅美が私に振り返る。

「抱いて……」

「止める……」

私は雅美の言葉に、はつきりとした恐怖を感じる。

雅美が床の上を私に向かって擦り寄り、欲情に滾った微笑みを向ける。

「止める……」

繰り返す私に、彼女が囁く。

「だめ……」

彼女が、私の腰を両手で掴んで下腹部に顔を埋めてくる。

私は、陰茎に熱く湿った荒い息と、舌の動きを感じる。それは快感と呼べるようなものではなく、苦痛であった。

私は下腹部に深く埋った雅美の頭に手を掛け、引離そうとする。しかし彼女は、私の腰を掴んだ手に精一杯の力を込めて抵抗する。口が萎えた陰茎を強く吸い、尿道の中に残っていた精液の残滓を吸い上げ、そして根元に歯を立てる。私はうめき声を漏らし、彼女の髪の毛を鷲掴みにする。歯が陰茎に食い込み、鋭い痛みが走った。驚きに髪の毛を掴む手を放すと、彼女は私を駆り立てようと、舌と口蓋を使って陰茎を激しく愛撫する。

鈍い苦痛と快楽が生じた。

私の意に反し、半ば陰茎が勃起したとき、雅美が顔を上げた。その口元には、啞えていた陰茎から移った彰子の血が付着していた。

雅美が昂ぶりの荒い息を吐きながら、立ち上がる。

床に座り込んだままの私の目前に、雅美の下腹部が迫る。

彼女はそのまま脚を開き、三本の縫針が食い込んでいる秘部を私に見せつける。乾いた愛液の臭いと雌の臭いが鼻を突いた。

脚を開いた格好で下腹部を私に向けて突き出している雅美が、片手で秘部の肉襞を開き、そこに食い込んでいる縫針をゆつくりと抜き取りにかかる。

「……………」

微かな声にもならないような声が彼女の唇から漏れ、そして再び、雅美の秘部が愛液のぬめりを滲ませた。

私は、その光景から目を逸らすことも出来ず、憑かれた者のように、その猟奇的な光景を見詰める。突き刺さってから時間が経つ縫針を抜き取る事は、彼女に鋭い苦痛を感じさせる。しかし彼女は、細かく太股を震わせ、押し殺した苦痛の息を吐きながらも、手を止める事はない。愛液のぬめりにまみれた雅美の粘膜が、濡れた光を放つ。

食い入るような視線の中で、雅美が肉襞に刺さった二本の縫針を抜き去り、最後の陰核に刺さった針をつまみ上げる。

そのとき私は、驚きの声を漏らした。

彼女は、その陰核を縫う針を抜き去る事はせずに、逆にその針を内部に食い込ませはじめただ。

雅美の吐く息が、その鋭い苦痛に途切れて、表情が歪む。しかし針をつまむ彼女の指には愛液がしたりはじめた。

そんな光景を見詰める私の頭に、雅美の手が掛かる。乱暴な程の勢いで、彼女は私の顔を自分の下腹部に押し付ける。鼻先で無毛の秘部が歪み、唇が愛液に濡れる。

私が彼女の尻に手を回し、その柔らかさをこね回すようにして強く掴み、爪を立てながら、舌を秘部にはわすと濃い愛液が舌に絡まりつき、傷ついた肉壁のぬめりを感じる。

私の頭を押える彼女の手に力が加わる。

秘部に歯を立てると、私の頭を押える彼女の手がいつそう力を増し、腰を私の頭を中心にして回しながら、濡れた肉壁を更に強く押し付けて来る。

喘ぎの聲ははじまる。

歯の狭間で、まだ薄い造りの肉がぬめり、そこを強く吸い上げると女の匂いが口に充滿した。

その淫らな味わいの中で、私は自分の股間に力が戻ったのを感じる。それは私の感情の一部が雅美に屈伏したあかしであった。

そして私は、エンプーサの姿を思い浮べる。想像の視野の中の黒猫は、何故か冷笑を浮かべていた。

神話が蘇る。

雅美が下腹部に押し付けていた私の顔を引き離す。

私は彼女を見上げ、彼女が私を見詰め返す。欲望の色を滲ませる冷たい笑みが彼女の顔にへばりついていた。

雅美が大きく下肢を広げて、床に座ったままの私の下腹部に跨るような格好で腰を下ろしはじめる。

針で陰核を縫われたままの秘部が、私の勃起した陰茎に触れると、彼女は腰を小さく動かし、探り当てるようにして、臍口に亀頭の先端を当てる。

雅美がそのまま躊躇することなく、腰を下げる。

私は、自分から求めて男を初めて受け入れる時の彼女の表情を視野に収める。一瞬、その顔が歪み、眉が顰められ、そして微かに開いた唇が息を吐き、喉が小さな声を上げる。

私は、陰茎を覆っていく生暖かな感触と、何かを押し開いていくとき味わいを感じ、そして、雅美の中で細く張り詰めていた糸がぷつりと音を立てて切断された。

太股に雅美の太股が触れる。

彼女の腕が私の背中を抱き、裸の汗に濡れた肌が合さる。

雅美が、自分の愛液に汚れた私の唇を吸いながら、床に付いた膝を支点に、腰を上下に動かしはじめる。秘部から溢れだした少量の血が、床に垂れ落ち、雅美の息が乱れた。

私は頬に吹き付けられるほのかな息と、小さな声を感じながら、目を閉じる。

闇に染まった視野の中で、私と雅美の接点から漏れだす淫らな音と、彼女が腰を上下させる度

にわずかに軋む床の音とが際立ち、陰核を貫いた針の固さを感じる。

陰茎に、初めて男を受け入れる膣壁の窮屈な感触と、そのぬめった肉壁で亀頭を擦り上げられる快楽が生じる。

私はいつしか身を投げ出し床に大の字に寝そべる。そんな私の身体の上で、雅美は大きく腰を振りつづけ、自らの乳房を揉みしだく。

激しく頭を振り、髪の毛がたなびき、膣から流れ出した赤い血が、私の陰茎を汚していく。部屋に彼女の上げる喘ぎ声が満ち、その声に私の乱れはじめた息が交差する。

私は身体が引きつるほどの強い快楽を覚える。その快楽は私の感情の奥底、その核を侵し、そして私はその侵される快感によって更に身をよじらせる。そんな私の姿は、傍目には苦痛に苛まれる者のように見えた事であろう。

そしてそれは正しいのだ。

私の精神の一部が今、不可逆的に変貌しようとしていた。無言の断末魔の叫びを張け上げながら。

私は射精の衝動を感じ、その強い快楽に身体を硬直させ、反り返らせる。床に付けた頭の髪の毛が床で擦れ、音を立てた。

雅美が、私の髪の毛を掴む。その痛みに目を開けた私の視野に、紅潮し、欲情の微笑みを浮かべた彼女の表情が写る。

雅美が、私の顔をまるで観察するように見詰め、腰を更に私の下腹部に押し付け、内部に啜えこんだ陰茎を中心にして、えぐり込ますように回す。女の肉の狭間に捉えられた陰茎が、根元あたりで強く絞め上げられ、苦痛と強い快楽が生じた。その次の瞬間、私は激しく身体をよじりながら、射精する。

それは半ば以上が苦痛であり、そして快楽であった。

雅美の、私の髪の毛を掴む手が緩み、離れる。

一つの深い息を吐いた雅美が両手を私の胸に置き、押えつげながら膝を立てる。秘部から、まだ完全に勃起を解いていない陰茎が抜け出し、彼女の膣から、血と精液とがしたり落ちる。

私は身を横たえたままに、片手を私の上に乗った彼女の頬に伸ばすと、雅美はその指を唇で啜え、舌を這わしながら歯を立てた。

私は更に彼女の唇を割り、その内に指を差し込む。すぐさま指の間を舌がはい回り、ぬめぬめとした暖かさが生じる。

私はもう片方の手を、彼女の下腹部に伸ばす。

血と精液にまみれている秘部を指でかきわけ、膣穴の中に深く指を押し入れる。二本の指が膣壁を押し開いた時、雅美が顔をしかめたが、私は女となったばかりのその膣を強く蹴る。

雅美の口と性器のぬめった感触が、双方の手に感じられる。

私はそれを楽しみながら、薄く笑った。

翌朝

私はまだ、半ば眠りの中にいた。

覚醒と睡眠との中間点である、その虚ろな状態の中で私は、昨夜の寝室での異常な行動を思う。

狂ったかと思われる程の情欲に囚われ、2人の女を責め馳った私の行動。そしてその責めを身体の内に取り込み、性の絶頂に置き換えた彰子、その彼女以上の情欲に囚われ、自ら進んで処女を喪失した雅美。

これから私達三人は、この屋敷の中でどのように生活していくのだろうか？ 情欲の赴くままに互いの肉体を絡め合い、馳り合い、この性の狂乱とも言える状態のままに、身体と精神を消耗し尽してしまうので、この淫らな営みをつづけるのだろうか。それともまだ何か別の道があるのだろうか……。

この状態に終止符を打つ事は簡単な事であった。ただ、私が大学での職をあきらめ、この屋敷を出て、京都の実家に戻りすれば良いのだ。しかし私は、自分がそうするとは決して思えなかった。二人の女の身体を責め馳った時の昂ぶり、嗜虐の味。通常の性の営みでは決して味わうことが出来なかったものがそこにはあった。決して私はそれから逃げ出す事は出来ないだろう。

ドアがノックされ、その音で私は完全に目を覚ます。

「起きていらっしやいますか？」

雅美の声であった。

私はベッドに身を横たえたままで答える。

「はい……」

雅美がドアを開け、部屋に入ってくる。入室の許しを問わずに彼女が部屋に入ってきたのは、これが初めてのことであった。

私は、彼女の姿をベッドに横になったままで見詰める。その表情にも態度にも、昨日の荒陰の翳りはなく、若い年頃の娘の、輝くような澁刺さがただそこにはあった。私はそんな彼女に嫉妬と、そして幾許かの怖れを覚える。

私はわざと身体を起こさず、横たわったままで雅美に問いかける。

「奥様はどうされていますか？」

彼女の視線が、一瞬だけ私から逸れる。

「起きていらつしやいますわ。先程、手当をして差し上げましたので……」

「……鋼を傷つけることはできないのですね……」

私の言葉に雅美が眉を顰める。

「え？」

「いえ、つまらない独り言です……」

見詰め返す彼女に私は、言葉をつづける。

「で、貴方はどうですか、身体の方は？」

雅美が微かに頬を染め、そして私の瞳をまっすぐに見詰め返してくる。

「疼いて、いますわ……」

囁くように答えた彼女の目に私は、ねだるような色を見る。先程思わず吐露してしまった言葉が脳裏で反復される。鋼は傷つけられない……。

私の中で情欲が復活する。それは私に、治りかけている傷口が痒みに痒みに疼くことに耐えられず、悪化するのを知りながらも掻きむしらずにはいられない時に抱くような感情を起させる。

私は無言で彼女を見詰め、そして彼女が開いているドアを後ろ手に閉める。

カチャリと響く低い音。それに重なるエンプーサの鳴く声の幻聴。

ベッドから半身を起すと、雅美が一步、私に近づく。手を差し伸べるとその手を彼女が握り、

そして、私は彼女を引き寄せる。

一瞬後、雅美の身体は、私の胸の中にあつた。

雅美が瞳を逸らしたままで囁く。

「今朝は……、許して下さい……」

私が問い返す。

「では、何故私の部屋に来たのです？」

「起きていらつしやらないので……ご様子をと……」

「嘘だ」

「……」

「君は彰子の手当をしたと言った。その時の彼女の状態を見て、君は欲情したんだ。つまり、お前は私に抱かれに来たんだ」

雅美が視線を床に落とす。私はその顔を掴んで上向かせ、唇を奪う。

震える細い肩を抱きながら雅美の舌を楽しんだ後、私は彼女を腕の中から開放し、その場に立

たせる。

「抱いて欲しいのなら、私をその気にさせてみるんだな」

雅美が躊躇し、そして微かに肯く。

瞳に灯った欲情の色をわずかに濃くして、彼女はスカートに手を掛け、私の目をさぐるように見詰めながら、スカートと下穿きを床に落とし、上半身を着衣のままに、裸の下腹部を晒け出す。彼女の剃り上げられた白い下腹部には、再び生えはじめた陰毛の小さく黒い点が無数に在った。それは彼女がまぎれもなく、肉の生理を持った者であることの証左であり、そして「女」であることのアかしであった。

昨夜の寝室での出来事が初めて事実として、私の心に定着した。

私は、彼女の股間で二枚の肉襞が造りだしている肉の合せ目を見詰め、白いメイドの服を上半身にだけ着けたその姿に、欲情する。

「はじめろ」

私は、内から湧きあがる欲望に掠れた声で命じた。

雅美が片足を、私が半身を起して横たわるベッドの縁にかけ、脚を開く。

「見て……」

開かれた太股と股間が形成する肉の台形に手を当て、指が秘部を覆う肉色の襞を開いていく。雅美が、内側の桜色をした箇所を剥き出しにして私の視線に晒す。そこは既に、うつすらとした欲情の兆しを湛えていた。

秘部を押し広げたまま彼女は、もう片方の手の指で陰核に触れ、指の腹を押し付けるようにして、ゆつくりとそこを廻りはじめた。愛液のぬめりが増し、時折指が膣口から滲みだす愛液を絡め取って、そのぬめりを陰核に塗り付けるようにして、彼女は淫らな自慰の行為をつづける。

唇が薄く開き、息が荒れる。

私は欲情を昂ぶらせていく彼女の秘部のありさまと、表情を見詰める。半開きとなった瞳、漏れる息に膨らむ小鼻、わずかに開いた唇から覗く舌先。

私は、彼女から欲情を更に引き出す為に囁きかける。

「今朝の彰子の尻はどうなった？」

私の言葉に雅美が、彰子の傷ついた身体を思い浮べ、荒い息を通して、囁く。

「傷ついていましたわ……」

「どんなふうにも？」

「……貴方に打たれた鞭の跡が……赤くなって、腫れて……」

「尻の傷跡を、お前は昨日の夜のように舐めたのか？」

「ええ……、そうして差し上げました……」

「舐めたのはそこだけじゃあるまい？」

「お尻も……」

「そこはどうなった？」

「切れて……、酷く傷ついていました……」

彰子の身体の惨状を思い浮べる雅美の息遣いと、秘部を愛撫しつつづけている手の動きが激しくなり、私は股間からの淫らな音を聞く。

「お前に舐められて彰子は昂ぶったのか？」

「……はい……、濡らされていました……」

「お前は どうした？」

「満足させて……差し上げました……」

「彰子の秘部を、舌で舐めたのか？」

「ええ……」

私は、彰子と雅美の白い肉体が絡まり合いながら、お互いの身体を貪り合う姿を思い浮べる。昂ぶりが助長される。

私は、雅美の下腹部に手を伸ばし、彼女が指で愛撫している陰核の下の、愛液を滲ませつつけている膣口に中指の指先を当て、押し込む。彼女は低く声を上げ、それでも食欲に指を内に取り込んでいく。昨夜処女を喪失したばかりのその箇所は、まだかなりの窮屈さを感じさせた。

私はその狭い彼女の内部を、指先を曲げるようにしながら、まさぐる。柔らかく、そして、ざらつくような秘肉の感触と濡れた粘膜の手触り、陰核の裏側の辺りに指をはわすと、微かな肉の窪みがあり、そこをこすり上げてやると肉厚のゴムのような弾力で膣穴が指を締め付けてきた。

私は激しく指を動かす。

雅美が眉を顰め、苦痛の表情を浮べる。

「痛いかな？」

私の問いかけに彼女が小さく肯く。私は更に二本目の指を膣に押し込み、その箇所を舐る。

「ああ！」

雅美が唇を噛み、私の指がうつすらとした新たな血に濡れる。

「きついかな？ 無理もあるまい、昨夜の今日だ……」

私は二本の指を抜き出し、愛液のぬめりと血で汚れた手を、彼女の服になすり付ける。白いメイドの服に、薄く滲んだ赤い線が引かれ、愛液が染込む。

「後ろだ、尻を見せろ」

私は命じる。

雅美がベッドから脚を下ろし、背を向けて、床に這おうとしたとき、私は彼女の胸に腕を回し、片腕に抱きかかえる。服の上から、乳房に手を当て、その弾力を確かめるように揉み、もう片方の手を、雅美の尻の狭間に差し込む。



私の手に、彼女の股間で息衝く二つの窄まりの、複雑な形状が触れ、指の先端にぬめりを感じる。

私は再び、指を深く膣に挿入する。指を取り囲む筋肉の管が蠢き、それを圧迫する。乳房を揉みつづける手に、布地を押し上げている乳首を感じ、指先で勃起するそれを捻り上げてやると、彼女が低く喘ぎの声を上げた。

私は、膣に挿入した指の腹で、彼女の内壁を擦りながら、親指の先端を秘部の下できっちりとした窄まりを見せている後孔に当てる。指先で軽く、その表面を搔くようにしてやると、彼女が囁いた。

「お尻……翳って。翳ってください……」

私は親指を、後孔の輪状の筋肉をかき分けるようにして押し入れる。

二つの指を、彼女の二つの窄まりに深く収めたまま、動かさずにその耳に囁く。

「締めてみるよ、お前の道具の具合を確かめてやるから」

私のその屈辱的な言葉に、彼女は更に興奮を昂ぶらせ、下腹部の筋肉に力を入れる。

尻房が微かに動き、連動する二つの肉穴が啞えこんでいる二本の指を強く締め付ける。膣穴の蠢きは、内部に収めた指をより奥へと取り込もうとする、うねりを伴ったものであり、後孔に挿入した指への締め付けは、膣よりも強く、そして厚い肉に裏打ちされた重く、もっと直接的なものであった。私はその二つの器官が、陰茎に与えるであろう快楽を思う。

私は二箇所へ挿入した指を、互いにこすり合わせるように動かす。薄い肉の壁を通して指の感触が伝わってくる。

雅美が低く、すすり泣くような声を上げはじめる。

私は、内からの衝動に耐え切れなくなり、彼女の股間から乱暴に指を抜き出し、身体を抱え上げようにして、ベッドに乗せる。

うつぶせにした彼女の尻に、私は強く平手を叩きつける。柔らかな肉が手の下で歪み震え、白い肉が赤く色付きだした頃、彼女の吐く息が熱くなった。

昂ぶりを押さえる事が出来なくなったかのように、彼女が自分から尻を持ち上げ、腰を後ろに突き出しながら、脚を開いた。

私は、自分の手が痛む事も忘れ、更に強く尻を打ちつづける。

雅美が上げる悲鳴に艶が生じる。

私は後ろから彼女の太股の付根辺りの肉を掴んで、左右に押し広げる。そこに見える秘部は愛液を吐き、それが太股までを濡らしていた。

私は手早く下着を取り、勃起した陰茎を彼女の膣口に背後から押し込む。まだ男を受け入れる事に馴れていない膣は、昨夜同様私に強い挿入感を感じさせ、締め上げてくる。

雅美が、自ら腰を振ろうとして身体を持ち上げた時、私はその背中に両手を置き、力を込めて

ベッドに押し付ける。くぐもった重い声上がり、彼女の胸と顔がベッドに埋まる。

私は彼女の背中を押さえつつける手を支点にして、昂ぶっていく情欲のままに、腰を激しく振る。

狭い膣によって強く陰茎をこすりあげる快樂。私はそれを、軽い苦痛とともに貪る。

彼女も私と同様に昂ぶり感じているのだろう、漏れる喘ぎの声には快樂の調子があった。

そして、激しく陰茎によって陵辱される膣口から掻きだされる愛液には、血の朱が混ざりこんでいた。

激しすぎる動きに、絶頂はすぐにやって来た。私は、低くうめきを上げて雅美の膣の内部に白濁をほとばしらせる。

私は、まだ半ば勃起したままの陰茎を雅美の尻の狭間から抜き出し、自分の精液と彼女の愛液に濡れたそれを、赤い手形が残る尻房にこすりつける。陰茎の表面に付着した粘液と血によって、亀頭がすべり、柔らかな尻をわずかに歪ませる。

陰茎によって歪む雅美の尻を見詰め、そしてその肌触りを亀頭で感じ取りながら、私は再び欲望の火が灯るのを自覚する。

うつぶせにされた姿勢から、のろのろと身を起そうする雅美の腹の下に、私は腕を回し、身体を仰向けにする。その私の行動が粗暴なものであった為か、ベッドの上から見上げる彼女の瞳には、微かな恐怖の色が生じていた。

私は、両手で彼女の左右の足首を掴み、大きく左右に割り開きながら、掴んだ足首が彼女の頭の横にくるほどに、その身体を深く折り曲げる。

腹に感じる圧迫感に苦しげな息を吐いた雅美が、命じられる事を待つまでもなく自分から、双方の足首を掴む。

ベッドの上で、大きく脚を開かれたままに、身体を折り曲げた格好となり、天井に向けて女の二つの秘部を晒す彼女を、私は見下ろす。

彼女の膣口からは、私があるの中に注ぎ込んだばかりの精液が溢れだし、下腹部に垂れ、上半身に着けたままの、乱れたメイドの白い服を汚している。

私はそんな彼女の腰の下に手を入れて、持ち上げる。

「……………」

背中と言うよりも首筋に掛かる自分の身体の重さに、彼女が再び重い息を吐く。しかし乱れた自分の秘部を見詰めるその瞳には、私と同様の欲望の火が燃えはじめた。

私は、彼女の精液を吐く秘部に指を這わす。

指が、愛液と精液のぬめりに塗れた桜色の肉襞をめぐり上げ、その内側の複雑な形状を剥き出

しにすると、雅美が弄られる自分の淫らな箇所を食い入るように見詰め、その欲望を昂ぶらせていく。私の指に新たな熱い愛液のぬめりが触れた。

囁くように問う。

「見えるか……お前の淫らなところが？」

そして、その言葉を補完するように、私は彼女の肉壁を左右に押し分け、指先でまだ精液の白濁を滲ませつづけている膣口を捏ね回す。

掠れ気味となっている声で雅美が答える。

「ええ……見えます、見えますわ……私の淫らなところが……。貴方の指に舐られる私の淫らなところが……」

秘部から再び粘液が垂れ下がり、深く折り曲げられた下腹部に糸を引いていく、しかしその殆どは、既に愛液のしたたりであった。

私は秘部を弄っていた指を、彼女に見せ付けるようにゆっくりと膣穴に押し込んで行く。雅美は身体で指が挿入されてくる感触を味わい、視線で、指が自分の身体の内に入っていく様子を見詰める。彼女が悩ましげな息を吐き、私の指が、膣の内部の暖かさと蠢きを感じる。

私の指を啜え込み、その動きとともに淫らに形を変える、自分の秘部を雅美は見詰めつづける。

「欲しくなったか？」

雅美に問いかける。

どこかぼんやりとした目付きとなった雅美が答える。

「見せて、貴方に犯される……私の淫らなところを……。お願い……」

私は冷酷な微笑みを浮べて、答える。

「駄目だ」

私は、雅美の顔を跨ぐような格好となり、勃起した陰茎を彼女の唇に押し付ける。

欲望の充足を妨げられた惨めさの色と、舐られ、虐げられる事による快樂の色とを湛えて、私を見上げる彼女の瞳に、私の欲情は更に助長される。

私は腰を動かし、固く張詰めた亀頭を彼女の閉じられた唇の表面に押し付ける。

「啜えろ」

私が命じると、雅美が唇を割った。

舌先が先端の窪みをこすりあげ、吸ったとき、私は腰をわずかに進め、亀頭の部分だけを啜えさせる。唇が陰茎のくびれを締め付け、舌が亀頭の表面を粘っこく愛撫しはじめると、私は思わず声を漏らしそうになる快感を感じ、両手で陰茎をこする。別種の快感が生じ、陰茎が更に張り詰めた。

啜えた亀頭を舌で愛撫する雅美が目を見閉じようとしたとき、私は荒い息を押し通すように言う。

「目を閉じるな」

彼女が目を開き、そして自分の口での愛撫によって快楽を感じている私の顔に視線を向ける。雅美の唇と舌の動きが激しさを増した。

私は、私を見詰める彼女の瞳を見返しながら、陰茎をこすり上げる手の動きを早める。

私は、私の精液によって顔を汚される彼女の姿を見る事を欲していたのだ。どんな酷い行為によっても、本質的には決して傷つく事のない女の顔を、私は私の吐き出す白濁で汚し、陵辱してみたかったのだ。しかし、それは所詮虚しい行為である事を、私は心の奥底で悟っていた。鋼を傷付けようとして、爪で引っ搔く行為は言わば、愚かしいものなのだから。

射精の衝動を覚えた私は、その開放に向かって手を動かさしつづける。

開放の瞬間、私は彼女の唇から陰茎を抜き出す。そして直前の張り詰めた陰茎が、びくびくと痙攣しながら、快感とともに精液を吐く瞬間を見る。飛び散った白濁が、彼女の唇と頬に向かって飛び、額とベッドに広がった黒髪に絡み付くさまを、私は凝視する。

そしてその次の瞬間、私は大きく顔を天井に向け、目を閉じ、射精の快楽にうめきを上げた。早くも勃起を解きはじめて陰茎に力を入れ、内部に残った少量の精液を雅美の頬にこすり付けると、彼女が唇から伸ばした舌で、そこに付着した白濁を舐め取った。

雅美がベッドから起き上がる。

ベッドに仰向けとなった私の胸を跨ぐように、大きく脚を広げて膝を付いた格好の雅美が、私の目前で、自分の下腹部を激しく愛撫しはじめる。

彼女は、片手で自分の秘部を開き、勃起した陰核をつまみ上げ、深く膣の内部に差し入れた指を激しく前後に動かす。

細い二本の揃えられた指によって、幾度も滲ませた愛液で汚れた肉壁が押し分けられ、その内側の淡い女肉を時折引き出しながら、淫らな自慰の行為をつづける彼女のその顔には、先程私が放った精液がこびり付いている。

雅美は、自慰の行為を見詰める私に、うわごとのように呟きつづけた。

「見て、見て、私の淫らなところを、私をその瞳で犯して、私を蔑んで……私を軽蔑して、私を哀れんで」

私は激しい欲望の虜となっていく彼女を、半ば醒めた目で見詰める。二度の射精によって私の欲望は洩れ、磨耗していたのだ。

雅美が、そんな私の感情を読み取ったのか、もどかしげな瞳に涙を浮べ、愛液にぬめる手を、上半身を覆っているメイドの服に掛け、ボタンを引き千切るかのようにして、乱暴に脱ぎ捨てる。

全裸となった彼女の乳房は赤く興奮に火照り、その頂点の乳首は、その桜色に似合わぬ程に尖りを見せていた。

彼女が私を挑発するように、その乳房を掴み、持ち上げるようにして、頂点で勃起する乳首に、

唇から伸ばした舌先で触れる。その間も、もう片方の手は激しい自慰の行為をつづけ、時折、太股を細かく震わせている。

「蹴って……蹴って……私の身体を……苛めて」

彼女の声と表情には、与えられぬ快楽を渴望する、性に憑かれた女の悲哀があった。すすり泣きの声を上げる雅美が、身体をぐるりと私の身体の上で回し、尻を向ける。

私の胸を跨いでいる脚は大きく開かれたままであり、彼女はそのまま私の脚に向かって身体を倒し、私の目前に狭間を愛液に濡らした尻を突きつける。

彼女の舌が足の指に触れた。

生暖かくぬめる柔らかな感触がはいまわり、私はその突然の奇異な感触に声を漏らす。

そのままの姿勢で彼女は、広げた股の前から伸ばした手で秘部を弄り、背中から伸ばしたもう片方の手の指で後孔の窄まり触れる。

雅美が、荒い息と快楽の声、そしてすすり泣きの声を上げながら、自分の二つの箇所を激しく蹴りはじめる。

私は、私の目の前で展開される、その淫らな自慰の行為を見詰めつづける。尻の狭間で蠢く二つの白い手と指、膣と後孔に同時に挿入され、内部を蹴りつづける指、その指の動きによって、淫らに盛り上がり、内部の造りまでを覗かせる秘部と後孔。憑かれたような声、すすり泣き、哀願の声。

「叩いて、お尻、叩いてっ、お願い」

彼女の唾液によって濡れた足の指に息がふきかかる。

哀願をつづける雅美の声が、掠れたものとなり、うわ言のような調子を帯びはじめる。やがてその声は切羽詰ったものとなり、彼女の絶頂が近い事を私に教えた。

雅美が一段と深く、指を膣と後孔に押し込み、動かす。股間の筋肉が震え、尻にその動きが伝わり背中へと伝播していく。

彼女が絞り出すような悲鳴を上げたその瞬間、膣口が男の陰茎を渴望するかのようになり、大きく蠢き、内部に差し込まれた指を独立した一匹の生き物のように締め上げる。

雅美が満たされぬ絶頂を迎える。

私はその彼女の様子をただ見詰めつづけ、不十分な絶頂を味わった後の、ぐったりとした彼女の身体が私の身体に倒れ込んでくるのを受け止める。

力無くベッドに投げ出された雅美の、愛液と粘液に濡れた指がシーツを汚す。

暫しの後、冷えた汗と、乾いた粘液とを身体に纏わり付かせたまま、彼女が私の部屋を出ていった。

その間、雅美は私に視線を向けようとはしなかった。

その日、私は自分の部屋を出なかった。

以下、次回へ